

Vent

音楽教育 ヴァン vol.44

巻頭インタビュー

西川伸一

多様性を認め合うチャンスを

特集

2020年音楽科指導レポート

音楽教育と研究大会を考える(小松康裕)

著作権Q&A ~オンライン授業に関連して~

参考楽譜

同声合唱『1ねん1くみ1にちのうた』

(作詞・作曲:金丸春香)

「協働」するために大切なことは

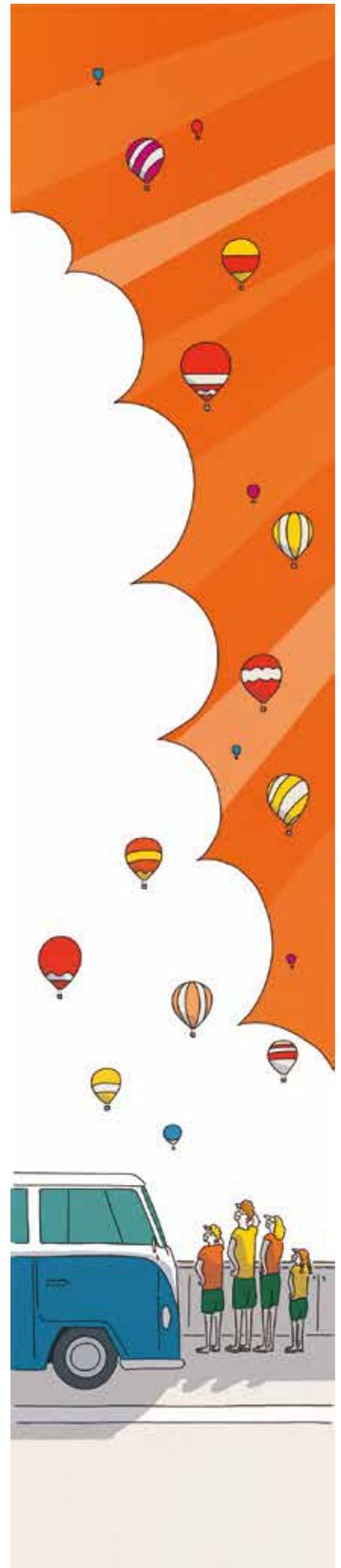
近年、異なる分野や異なる人々による「連携」や「融合」、そして「協働」の必要性が、社会全体でまさにスローガンのように声高に叫ばれています。もちろん様々な分野、異なる価値観をもつ人々が「協働」することが重要であることはまちがいありません。ただ、実際にどれほど意義ある「協働」が進められているかと問われれば、自らを省みても、「協働」の形は取っているものの、侃々諤々の議論や、互いの違いを認め合うことなどが十分ではない「協働」も少なくないと思われまます。自らが培ってきた経験、そこから導かれた方法論や価値観にこだわりをもつのは当然です。それらをひとまず抑えて、異なるものを受け入れ、そのよさや互いの違いを認めていくことは容易ではありません。

しかしながら、新型コロナウイルス感染で先が見えない時代だからこそ、これまで以上に、様々なレベルで一層の「協働」が必要となるでしょう。では、そのために大切なことは何か。西川伸一先生のインタビューには、この問いに対するたくさんのヒントが散りばめられています。専門や立場、考え方の異なる人々が、それぞれのキャリアに関係なく自由に交流し、活発に議論できる場。互いの違いやずれをむしろ楽しめるような場。そうした開かれた場を社会に、地域に、そして学校につくることが求められているのではないのでしょうか。

佐野 靖 (東京藝術大学 教授)

Contents

- 03 巻頭インタビュー
西川伸一 (医学博士・京都大学名誉教授)
- 08 特集
2020年音楽科指導レポート
音楽教育と研究大会を考える 小松康裕(全日本音楽教育研究会 事務局長) /
著作権Q&A ~オンライン授業に関連して~
- 14 ご案内
— 新作合唱曲による公開講座 — Spring Seminar 2021
- 17 授業者に訊く
金丸春香 (藤沢市立駒寄小学校 教諭)
- 22 Kyogei Presents
音楽診断 あなたのタイプは？
[第9回] フランスの作曲家編 (監修・解説：山田治生)
- 24 参考楽譜
同声合唱『1ねん1くみ1にちのうた』
- 30 エッセイ
新・音から広がる世界 [第4回] 藤原道山





Shinichi Nishikawa

巻頭インタビュー

多様性を認め合う チャンスを

医学博士・京都大学名誉教授 西川伸一

日本の生命科学研究を牽引してこられた西川伸一先生。現在はご自身が代表を務めるNPOの活動を通して、最先端の情報を誰もが享受できるよう尽力されています。科学者でありながら芸術にも造詣が深く、オペラについて熱く語ってくださる姿が印象的でした。本インタビューでは、科学の視点から、人間の多様性と芸術教育の展望についてお話を伺いました。

聞き手 佐野 靖 (東京藝術大学教授)

○ 西川伸一(にしかわ・しんいち)

医学博士・京都大学名誉教授。熊本大学教授、京都大学教授、理化学研究所発生・再生科学総合研究センター副センター長などを歴任。現在はNPO法人オール・アバウト・サイエンス・ジャパン (AASJ) 代表理事。幹細胞や再生医療に関する教育研究、科学啓蒙活動などで活躍している。



獲得される能力の裏に
消えていく能力がある
という見方をすると、
多様性への理解も
変わってくるかも
しれません。

21世紀の大転換の中で

佐野: 西川先生が代表を務められている「NPO法人 オール・アバウト・サイエンス・ジャパン(以下、AASJ)」のホームページには、毎日のように最新の論文や本が紹介されています。長い論文もすぐに読みこなして情報を提供してくださっていますよね。

西川: ありがとうございます。ホームページの「論文ウォッチ」には1日2,000~3,000人ほどの訪問があります。訪問者は学生さんや研究者の方が多いようです。

佐野: 西川先生は幅広い分野に精通されていますが、ご専門は何になるのでしょうか？

西川: もともとは幹細胞生物学や再生学が専門です。京都大学や理化学研究所に所属してきましたが、人生の後半は「人のために生きる」と決めて現在はAASJで活動しています。もう縛りがないので何をしてもよいわけです。今は「生命科学の目で見る哲学書」という課題を決めて、昼はギリシャ哲学から順に書物を読み、夜は自分の楽しみの本や論文を読むという生活をしています。「できる限りのものを自分の頭の中に詰め込んだときに何が見えるのか」「人生を終えるときに何かを予想して死ぬのか」というのがテーマですね。

佐野: 21世紀になって予想もつかないようなことが起こり続けている中で、西川先生は5年先、10年先を見て動いていらっしゃるように感じられます。

西川: 科学でも何でも、21世紀に入ってから物事が大きく変わっているのを実感しています。脳科学もそうですし、遺伝子編

集の分野でも日々、「こんなことができるようになったのか!」と驚くばかりです。佐野先生をはじめ、さまざまな分野の方々とアクティブに話をするようになったのも21世紀に入ってからです。『ネイチャー』や『サイエンス』といった科学雑誌も、科学以外のテーマを多く扱うようになりましたし、それこそ音楽の話題も出てきますよ。科学と音楽など、異なる分野の人たちをもっともっと自由に交流して、それぞれの得意なところを寄せ集めたらおもしろいのではないかと考えています。

佐野: そういう面では、最近になってようやく、学会レベルでも音楽と美術との合同開催や他領域の専門家とのシンポジウムができるようになってきましたが、まだまだそこまでの気運は醸成されていないのが現実です。

西川: 異なる分野からのアプローチがないというのは課題ですよ。今の科学者が音楽をどのように見ているのかを音楽の専門家たちに知ってもらう、といった相互のコミュニケーションができるとういと思います。例えば、オペラの演出家が科学の見方に触れたら、また違った演出をするようになることでしょう。それで思い出されるのは、パリのオペラ座で上演されたラモアの『インデス・ギャランテス(優雅なインドの国々)』。普通のアリア以外は全部ブレイクダンス*という演出で、ほんとうに感心しました。人類共通のリズム感から古典音楽を考えていくといった試みです。日本でも、もっと人間の本来の性質を追究しながら演出するような人が出てきたらうれしいなと、いつも思っています。

獲得される能力・消えていく能力

佐野:脳科学では、音楽や美術の能力とはどのようなものだと考えられますか？

西川:器楽科の学生さんは相当練習しないとイケないですね。1日10時間ピアノを弾くというのは科学的に何をやっているかという、意識から音楽を消していくわけです。僕らは「手続き記憶」と呼ぶのですが、例えば何も考えなくても歩けるのは手続き記憶があるからなんです。楽器を弾くことも同じで、「こういう音楽をつくりたい」という頭だけでは演奏をコントロールできませんよね。

佐野:手続き記憶のために10時間弾いているといっても、おそらくその中でタイプが分かります。長時間やるのがルーティーンでそうしないと不安なタイプもいれば、練習させられているという意識もなく、自発的にただ夢中に弾いているタイプもあります。

西川:フリードリヒ・グルダ*が20代で「もう僕に練習することはなくなった」と言ってジャズを始めたというのは有名な話です。科学の人間から「これは手続き記憶ですよ」ということは言えるけれども、そう言われてしまうとそんなものかと思ってしまう。でも、自分が何をしているのかを認識することも大事ですよ。10時間弾くこと自体に意味があるわけではなく、自然に「これはたまたま手続き記憶をつくっているだけだ」と思うことで、今まで何をやってきたのか、自分の何を形成してきたのかということを知ることができる人は優れた人なのです。

佐野:そのような人は、内なる自分の声をいつも聴いているから、同じ曲でも飽きなくやっているし、そんなに古びないんですね。

西川:これは僕がそう思っているだけですが、音楽の人たちの能力は、アスリート的な能力+知的な能力。

一方で美術の人たちは、ものを見たときの統合の仕方^{あんばい}の塩梅を、手続き記憶としてではなく自然に獲得してきた人たち。普通の人が抑え込んで捨ててきた力^{あんばい}というのをどれだけ残しているか、というのが美術の能力なんだろうと思います。例えば、鏡を見ないで自画像を描けますか？僕は描けません。絵が描けないのではなくて、自分の顔が浮かばない。でもやっぱり絵画科の学生さんはほぼ描けますね。自画像はそれだけで多様性が分かるからおもしろい。以前、高校の美術の先生と話をしていたときに「生徒に自分の顔を描かせてみたら？」と提案したんです。自画像をきっかけに自分たちの多様性を認識するという活動をやってみたらどうかと。

佐野:それはおもしろいですね。

西川:人間にはそれぞれ違いがあって、本来もっていた能力を残している人と残していない人がいる。脳科学が進んで分かってきたことですが、誰でも7歳ぐらいまでは逆さまに文字を書いたり読んだりする「鏡文字」の能力があるんです。ところが文字を教え始めると、ほとんどの人がその能力を失ってしまう。文字を覚えることでクリエイティブな視覚イメージが抑えられてしまうんです。その一方で、失読症の人にはクリエイティブな仕事

をする人が多いという話もあります。僕らは社会の中で、周りからいろいろな意味を伝えられ、その中で自分を形成していくのですが、獲得される能力の裏に消えていく能力があるという見方をすると、多様性への理解も変わってくるかもしれません。

佐野:多様性は誰にでもあるのでしょうか？

西川:一概には言えませんが、多様性は一人一人にあるのだと僕自身は思っています。例えば、自閉症の子どもたちは多様性を拒否していると思われていたのですが、キーボードなんかを使うとコミュニケーションがとれるようになり、彼らがとても多様な表現をすることが分かってきました。実は人間の脳の構造にはそれほど大きな差異はないんです。ほんの小さな違いから生み出される力がすごく大きいわけで、その力を有効に使えば誰もが創造的になれるかもしれないとも考えられます。例えば、

みんなが同じ音程で同じように歌っても、
すでに多様なわけですよ。
そうした音楽のもつ多様性を
どう生かしていくのが鍵であるように思います。



○ 佐野 靖(さの・やすし)

東京藝術大学教授(音楽教育)。『唱歌・童謡の力：歌うこと=生きること』『文化としての日本のうた』等を刊行。文化庁プロジェクト「アートによる復興支援」等で学校・地域・大学が協働するアウトリーチのプロジェクトに取り組んでいる。2016年度より、東京藝術大学学長特命・社会連携センター長に就任。

*フリードリヒ・グルダ
(Friedrich Gulda, 1930 - 2000)
ウィーン生まれのピアニスト・作曲家。
J.S.バッハ、モーツァルトなどを得意とする一方、
ジャズの演奏家としても活躍した。



サヴァン症候群が有名ですよ。ニューヨークの摩天楼をパッと見ただけで窓1枚違わずに描くことができる。あのような能力だって、抑えられているだけでたぶん僕らにもあるんですよ。

科学者から見る芸術教育

佐野: 芸術教育において、さまざまな多様性をもつ子どもたちとどのような関わりを築いていけばいいのか、科学者の視点から提言されたいことはありますか？

西川: 科学者がすぐに何か言えることではないので、いろいろな分野の方とこのテーマについて議論する機会があればと思います。教育という分野はとても難しいのですが、一人一人の蓄積した情報のチャンク(塊)をしっかり分析して、どう育てていけばいいのかということ科学的なベースも含めて検討していくことが大事ではないでしょうか。一般的な教育の中でどこまでできるかを考えたうえで、「音楽とは何か」ということを科学者と芸術家とで一度、侃々諤々かんかんがくがくやってみないことには分からないと思います。

佐野: 「科学とは何か」と聞かれたら、西川先生はどう答えられますか？

西川: 科学というのは真実を追い求めるものではなく、「何が正しいかということをして他人とアグリー(同意)するために行う手続き」なんですよ。例えば、地動説を唱えて教会から迫害されたガリレオ・ガリレイが自身の著書で批判したのは天動説そのものではなく、それを根拠なく押し付けてくるカトリックに対してなんです。それを克服するには、一人でも多くの人が「分かった」というためのプロセスが必要です。それが「科学」ですよ。一方で、芸術は他の人とアグリーする必要がないですよ。哲学に関しても、コンセンサスをとる仕組みというのはなかなかありませんから。現時点では、科学だけがその手続きがある分野だと思っています。小さい子どもにも教えられくらいシンプルですよ、科学は。

佐野: 科学や医学の立場から見て、芸術教育の重要性や、感性を育てる意義などは感じていらっしゃいますか？

西川: もちろん感じています。

佐野: それに対して我々がどう応えるのか。ただ実のところ、ほんとうに科学と芸術の融合というのが可能なのか、疑っていません。

西川: 科学と芸術が互いに敬意を抱き、創造し合える場面というのはほとんどないので、一つのテーマに対して相互に本音で議論することが大事です。科学者は「僕らが抑え込んできた能力を芸術家も持っているとしたら、クリエイティビティというのは足していくのではなく残しておいたものである」と仮定することはできても、これを自分たちだけが一方的に説いてしまうのは絶対ダメ。そこで「そんなことはない」と言ってくれる立場の人が必要なんです。

佐野: 互いが中途半端に共有しても火花は散りませんし、むしろ立場の違うほうがおもしろい。そういう場をつくらないといけませんね。

違いを認め合うということ

佐野: 学校教育の現場で先生方が「多様性」という言葉と向き合うときに、どういったことを課題として意識するとよいのでしょうか？

西川: 一人一人の子どもが多様であるということは先生方も感じていらっしゃると思うのですが、そのうえで大事なのは、子どもたちどうしも互いの多様性に気付き合えるようになることです。「上手に歌えるかどうか」といった話に終始してしまったら、それは多様性をつぶすいちばんの例ですよ。全ての教科では難しくても、音楽教育や美術教育だけでも「君は違うね!」ということを肯定的に認め合えるようなカリキュラムができないかと。

佐野: 以前、教育学者の佐藤学さんが「表現を育てようとするから技術偏重になる」ので、「表現する“人”を育てたほうがいいですよ」とおっしゃっていましたが、インパクトのある言葉でした。みんなが同じ音程で同じように歌っても、すでに多様なわけですよ。そうした音楽のもつ多様性をどう生かしていくのが鍵であるように思います。

西川: 芸術には、一人一人が多様性を感じ合える「チャンス」があります。先ほどお話した(ラモアのオペラでの)ブレイクダンスは、そういう意味での自由や即興性が重視されていた。同じ形で踊らせようとするのとは違います。同じように、どうしたら子どもたちの多様性を生かしていけるかというテーマで、教育についても考えてみるのはどうでしょうか。

佐野: 音楽の授業における多様性の実態を集めてみたいですよ。

西川: 例えば、聴いたことのないような音楽を聴かせて、子どもたちがどういう感覚になるか一人一人に尋ねてみる。そうしたことはあまりしませんか？

佐野: 大学院生の研究ですが、ある高校で演奏家が聴かせ方を変えて、鑑賞の感想文の比較をしたことがあります。一方のクラスでは曲の背景や鑑賞のポイントを説明してから、もう一方のクラスでは全く情報を与えずに、演奏を聴かせました。

西川: 興味深い研究ですね。

佐野: 前者のクラスでは「ここが聴き分けられた」「ストーリーを感じ取れた」といった課題ごとの感想が出てきました。一方のクラスでは「こういう感じを受けた」というような、自分と向き合う感想が多かったんです。イラストで表現した生徒もいたんですよ。どちらがいい悪いは別として、学校の授業では、課題に即してきちんと聴き分けられた子のほうがよい点数をもらえる。授業である以上当たり前かもしれませんが、ほんとうにこれでよいのかどうか、反省的思考をもって問い直すことが大切ではないでしょうか。芸術教科だけでも、互いの違いを認め合える場になればよいですね。

一度生まれたらもう二度と
同じゲノムの人間は出てこないですから。



芸術教育にこそ多様性を育てるチャンスがある

佐野: 便利な文明社会に生まれた今の子どもたちに対しては「感性が退化しているのではないか」といった偏見もありますが、多様な人間のポテンシャルを考えた場合に、一概に決めつけるような見方は危険でしょうか？

西川: それは危険だと思いますね。今の社会ではいろいろなものが使えるので、仕方なしに使うのではなく、積極的に使っていきほうが正しくて。例えば、失読症の子どもは、本で与えるから見たときに目移りするんです。ところが、スマートフォンの小さい画面で1〜2文ずつ出てくるようにすることで症状は改善します。それから先ほど例に挙げた自閉症の子どもたちも、キーボードが使えるようになると自分から表現し始めるわけですね。このように、技術製品があって初めて、さまざまなことができるようになってきたのは確かで、活用するチャンスはまだまだあると思います。

佐野: 近頃は「多様性」「ダイバーシティ」といったワードがいろいろところで使われていて、それが逆に一律だと感じることもあります。

西川: 多様だなんてことは当たり前には決まっているんですよ。一度生まれたらもう二度と同じゲノムの人間は出てこないですから。そういう発想でいくと「多様ですよ」と言っても意味はない。僕らはその多様性をどう維持して社会の活力にしていけるかを考えればよいのです。例えば、多様性の一つの重要なテクノロジーとして「ブロックチェーン」の話をする場合があります。全ての個別のやりとりが記録されて、なおかつ見たいときに誰でも見られるという構造になれば、それで信用が生まれます。信用のあるネットワークで新しい意見を集約できるようになると、いざい選挙でなくても政治が変わる時代も来ると思うんです。すごいテクノロジーですよ。音楽教育でもそうした方法で新しい芽が見えるようなことがあるかもしれません。

佐野: これからの教育にはどんなことを期待されていますか？

西川: 多様性を重視していろいろな人を許容できる人間を育てるチャンスというのは、芸術教育にこそあるんじゃないかな。

佐野: 芸術教科は他の教科よりも教師の役割が大きいですよ。教師の人間性が表れる。そこが難しいところでもあります。

西川: 先生方には、音楽を教えるということの特権を認識していただきたいですね。芸術教科には他教科にはない特権がある。それを認識することはとても大切です。先生方がもっと自由になって、自信をもって子どもたちと接していけるようになってほしいと思います。さまざまな子どもたちが集まる中、芸術で何を教えるのかというのはある意味でチャレンジングなテーマだと思います。実際の取り組みと成果をウェブ上で共有するなど、参加型のシステムができるとおもしろいでしょうね。他校の様子を知りたい先生たちが、リアルタイムで参加できるような仕組みをつくれれば、教育の世界も大きく変わっていくのではないかと思います。

佐野: 今の子どもたちにメッセージを贈るとしたら、どんなことを伝えたいですか？

西川: 実際に子どもたちと接しているわけではないので、何を伝えたらよいでしょうかね……。JTの生命誌研究館にいた頃は中学生に講義をしたこともあります。一人一人の姿勢に違いがあって、そのときも彼らに何を伝えるべきか、なかなか難しいなと感じました。毎日子どもたちと接している先生方にとっても難しいところなのでしょうね。ただ一つ伝えるとすれば、今の時代はチャンスがいっぱいあるので、自分の枠を決めずに、あらゆることを吸収して行ってほしいなと思います。

NPO法人 オール・アバウト・サイエンス・ジャパン(AASJ)

代表理事：西川伸一

医学・医療を中心に科学を考え、一般の人と専門家のスムーズなコミュニケーションの実現を目指す。同ホームページには、生命科学に関する最新情報をはじめ、書籍や論文の紹介など、分かりやすく充実したコンテンツが満載。<https://aasj.jp>



西川伸一先生と
佐野 靖先生。
東京都内で

2020年 音楽科指導レポート

音楽教育と研究大会を考える

ヴァンはこれまで「Information」で全国の研究大会の情報をご紹介してきましたが、2020(令和2)年度に予定されていた研究大会は新型コロナウイルスの影響により、これまでどおりの開催はできなくなりました。今号の特集では、全日本音楽教育研究会が調査した各地域の音楽科指導への取り組みをもとに、事務局長である小松康裕先生とともにこれからの音楽科教育について考えます。

小松康裕(全日本音楽教育研究会 事務局長)
聞き手:ヴァン編集部

※取材は感染防止対策を講じたうえで、2020年7月上旬に行われたものです。



学校現場の今

Vent(以下、V): 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、この秋に実施される予定だった全日本音楽教育研究会(以下、全日音研)全国大会や地区音研大会が中止*になってしまったとお聞きしています。

小松: 今年度の全日音研全国大会群馬大会は、本来であれば地区音研大会が輪番で全国大会として開催することになる初めての大会でした。各地区音研大会の責任者の先生方に、状況や開催の有無について伺いました。先生方が中止と決断された

*九州音楽教育研究大会は紙上発表

その裏側に、これまでに積み上げてこられた運営準備や研究活動が実を結ばないことへの断腸の思いがあることを感じます。全国大会を含め、各音研大会は、それぞれ強い結束力を持ち、特色を持った深い教育研究の場であると同時に、親交を深めるのに大切な情報交換の場でもあります。その機会がなくなってしまうことは非常に残念です。

V: 令和2年度は小学校で新学習指導要領による授業がスタートし、教科書も改訂されましたので、本来であればいろいろなことを先生どうして確認する年度であったと思います。

小松: 小・中学校も高等学校も、移行期間を通して新学習指導

2020(令和2)年に予定されていた研究大会

第62回 北海道音楽教育研究大会 札幌大会
11月13日/札幌市教育文化会館 他
〈大会主題〉
音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

第68回 東北音楽教育研究大会 宮城県仙台地区大会
第56回 宮城県音楽教育研究大会 仙台地区大会
11月19日/七ヶ浜国際村 他
〈大会主題〉
奏でよう 生きる喜びを つながろう 音楽で

令和2年度 全日本音楽教育研究会全国大会 (小・中学校部会大会)群馬大会
第62回関東音楽教育研究会 群馬大会
第55回群馬県小・中学校音楽教育研究大会 高崎大会
11月6日/群馬音楽センター 他
〈大会主題〉
心ふれあう 豊かなひびき

令和2年度 全日本音楽教育研究会全国大会 高等学校部会大会 茨城大会
11月5、6日/ザ・ヒロサワ・シティ会館 (茨城県立県民文化センター)
〈大会主題〉
音楽でつながる人と心 ~生涯にわたって~

令和2年度 全日本音楽教育研究会全国大会 大学部会大会
11月14日/東邦音楽大学 川越キャンパス

令和2年度 第62回 近畿音楽教育研究大会 奈良大会
11月20日/奈良県橿原文化会館 他
〈大会主題〉
響DO!(協働)~感じる 深める 心の音色~

第51回 中国・四国音楽教育研究大会 岡山大会
11月13日/岡山シンフォニーホール 他
〈大会主題〉
未来につながるわたしと音楽

第61回 九州音楽教育研究大会 福岡県大会 北九州大会
10月2日/北九州芸術劇場 他
〈大会主題〉
心が動き、つながり、広がる、豊かな音楽の世界
※紙上発表に変更

要領を受けた実践研究を行ってきました。正にその総括のための大会であったわけです。全日音研として何ができるのかを考え、各地域の教育現場の調査を行いました。今、学校現場でどのような授業工夫をされているかを、互いを知ることができれば力になれると思ったのです。

V: どのような形式の調査を行ったのですか？

小松: 特に感染者が多く発生している地域の支部長に、調査の協力をお願いしました。調査内容は、感染防止のための多くの制限がある中で、音楽科としてどのように授業対応をしているのか、また、現場の状況や指導の工夫など教えていただくものです。たくさんの回答をいただきました。

V: 小松先生のもとに集まった調査回答をご覧になって、どのような印象だったのでしょうか？

小松: 各支部の音研組織が迅速な対応を行っていることにたいへん感服しました。感染防止に有効な対応策を提示する充実した資料も多く、全国の先生方の実践から「音楽科指導をただえさせない！」という強い思いを感じました。内容についてはこれまでの実践を補充しながら現状を克服するものが多いのですが、同時に、通常どおりの音楽授業が再開されたときにも子どもの音楽性や感性を伸ばす学習として有効な活動も多く含まれていました。ここでは4つの地域の実践を紹介したいと思います。

各地域の対応策と実践

【資料1：札幌市／小学校、中学校】

小松: まずご紹介するのは、北海道音楽教育連盟(以下、北音教)です。北音教札幌小・中学校支部は札幌市教育委員会の監修を受けて、指導対応参考資料『『新しい生活様式』を踏まえた音楽科の学習指導について(小学校、中学校)』を作成し、札幌市内全ての小・中学校に配布しました。

国の定めた『『新しい生活様式』を踏まえた学校の行動基準(レベル1～3)』に対応して、歌唱、器楽、創作(音楽づくり)、鑑賞それぞれの具体的な指導内容を示してあります。音楽室の環境、授業前後の児童・生徒への対応、学習指導要領の内容をどう教えるかなど、先生方が迷わないよう細やかに示しています。

北音教はいち早く情報を集めて資料を作成し、それらを配布するまでの対応が、非常に迅速でした。ふだんから北音連と教育委員会、学校現場の連携がうまくいっているからこそ、そのようなできたのではないかと推察するところです。

【資料2：姫路市／小学校、中学校】

小松: 次に姫路市教育委員会が主体となった取り組みを紹介します。教育委員会によって「姫路まなび応援サイト」が開設

資料1

札幌市／小学校、中学校



回答: 藤本尚人先生
(全日音研本部北海道支部長、札幌市立星置中学校校長)
「新しい生活様式」を踏まえた音楽科の学習指導について(小学校)
1ページ目(全4ページ) 北海道音楽教育連盟

資料2

姫路市／小学校、中学校



回答: 中條浩樹先生
(全日音研本部兵庫県支部長、姫路市立朝日中学校校長)
「姫路市共通課題」
第2弾より小学校6年生の課題 姫路市教育委員会



「今だからこそ、授業の本質が見えるかもしれない」という発想に置き換えられれば、ピンチもチャンスになるのではないのでしょうか。

され、そこに公開された「姫路市共通課題」（現在は閲覧終了）では、自宅学習における学習課題と学習方法を全教科、小・中学校の全学年分が全て紹介されました。しかも「第1弾」「第2弾」があり、十分な量になります。現場の先生方は、該当する指導案を確認することで、児童・生徒に自宅学習の方法を適切に伝えることが可能です。

例えば小学校6年生の音楽の場合、自宅や学校のできる課題、合計4つあります。1つの課題に2～3日かければ、相当数学習することができますよね。指導案の立案者と確認者は「学校指導課」とありますので、指導主事の先生が作成されたものでしょう。内容については、たいへん現場に沿ったものになっており、教育行政と学校現場の連携があったのではと推察しています。

具体的に教材名を挙げて、教育芸術社の自宅学習支援コンテンツや教科書該当ページなども紹介されています。さらに時間数や分散登校を考慮したうえで、試験方法や評価のポイントまで記されているので、とても使いやすい資料です。

【資料3：京都市／小学校】

小松：京都市では小学校音楽教育研究会校長会（以下、市音研校長会）が資料「6月 学校再開に向けて 音楽科授業の進め方（試案）」を市内の全小学校に配布しました。ここも非常に早く動いていらっしゃいました。資料では、1つの題材に対して目標や教材の指示、評価規準例など、指導内容が明確に記されています。全国的に音楽専科の先生がいる小学校は非常に少なく、京都市も担任の先生が音楽の授業を行うと聞いていますので、このような対応は支えになったと思います。

4年生を例にして、「歌のにじ」を使った指導の流れや指導のポイントが、丁寧に順を追って記してあります。内容については、歌唱と器楽が中心です。非常に細やかに解説されており、市音研校長会の先生方の気配りは素晴らしいと思います。

資料3
京都市／小学校



回答：綿越貴久先生
（全日音研小学校部会京都市支部長、京都市立西陣中央小学校校長）
6月 学校再開に向けて 音楽科授業の進め方（試案）
1ページ目（全3ページ） 小学校音楽教育研究会 校長会

【資料4：東京都／中学校】

小松：東京都については、東京都中学校音楽教育研究会が各中学校に出したアンケートの回答一覧を、資料としていただきました。質問項目である、施設・設備・配置(A)、感染防止(B)、歌唱授業(C)、カリキュラム工夫(D)、器楽・創作・鑑賞(E)、その他(F)に関して、それぞれどのように対応しているのか、先生方に回答していただく形をとっています。多くの意見が集まり、プリントアウトしてみるとA3用紙にして12枚分になります。

中でも多かったのは、歌唱に関する回答や意見です。先生方が、歌唱の授業をとだえさせないよう、取り組みを模索している実態がうかがえました。

全体的な方針として、鑑賞と創作を中心にするわけではなく、歌唱や器楽もこれまでどおり大切に扱おうという意志を感じます。どの回答からも、先生方は普通の授業に戻れたときのことを大切に考えていらっしゃる事が強く伝わってきます。

今回ご提供くださった資料は全日音研のホームページにも掲載いたします。ぜひご覧ください。

資料4
東京都／中学校

回答：角康宏先生
(全日音研本部東京都支部長、葛飾区立青戸中学校校長)
東京都中学校調査回答一覧
1ページ目(全12ページ) 東京都中学校音楽教育研究会

新たなステージのために今できること

V：今日は貴重な資料をご紹介いただき、ありがとうございます。来年はこれまでと同じように研究大会が開催されることを切に願っています。

小松：そうですね。今回あらためて研究大会の開催地の負担の大きさを感じました。研究大会では授業公開に向けて、数年前から講師を招いて授業研究を積み重ね、吟味された指導案を作り、完成度の高い授業を公開し、音楽活動の質を高めます。それはとても素晴らしいことです。しかしまた、そこに費やされる多くの時間と労力は、開催地の負担を増大させていることも実感しました。感染拡大防止に配慮した「学校の新しい生活様式」に沿って行くこれからの教育活動は、教師への負担のさらなる増大が危惧されます。この機会に、研究大会においても、運営方法や大会内容の見直しが必要になるかもしれません。開催者と参加者双方にとって、授業改善や授業力向上に焦点を当て、開催者の運営負担を軽減するような大会にしていくことが、これからの課題だと思いました。

V：この状況を機に、これまで当たり前とされていたさまざまなことに変化があるかもしれませんね。

小松：2018年ISME(国際音楽教育学会)アゼルバイジャン大会に参加しました。数多くの研究発表プログラムの中で「Why music at school」と題した研究発表に目が止まりました。そこで行われていたのが、「若い学生たちが、公立学校で音楽を強制される正当性を考える」という題材の発表です。私の乏しい英語力で聞き取った結論は「音楽教育に携わる者は、常にこの疑問を受け止めて正面から考えなければいけない」というものでしたが、まさに今、我々が考えるべきことだと思いました。こんなときだからこそ私たちは、音楽の授業の在り方についてじっくり考える必要もあると思います。「今だからこそ、授業の本質が見えるかもしれない」という発想に置き換えられれば、ピンチもチャンスになるのではないのでしょうか。

V：次回の全国大会開催地は青森県です。ご盛会をお祈りしております。

小松：2021(令和3)年度は、第69回東北音楽教育研究大会青森大会でもある八戸・三戸大会が総合大会として開催されます。そこでは多くの苦難を乗り越えて、音楽科教育に取り組んできた全国の先生方が2年間の苦労を語り合う場になっていたと、そして全国大会が、音楽科教育の新たなステージに向かって飛躍する大会になることを願っています。

著作権 Q & A

～オンライン授業に関連して～

オンライン授業や自宅学習の増加に伴い、著作権に関する疑問や問い合わせが増えています。このコーナーでは、2020年4月28日にスタートした「授業目的公衆送信補償金制度」やその具体的な手続き、そして新型コロナウイルス感染拡大に伴う特例措置などを整理しました。安心して著作物を利用するための参考になれば幸いです。

Icon made by Freepik from www.flaticon.com

Q1 「授業目的公衆送信補償金制度」とは何ですか？

A 営利を目的としない教育機関において、一定の額の補償金を支払えば、授業の目的で必要と認められる範囲の著作物を公衆送信することができる制度です。これまでは紙での配布や遠隔合同授業のみ原則許諾不要でしたが、それ以外の授業目的公衆送信についても補償金を支払うことにより無許諾で行うことが可能となりました。



Q5 制度が適用される範囲を教えてください。

A 「学校その他の教育機関」で「教育を担当する者」や「授業を受ける者」が、「授業の過程」で、公表された著作物を公衆送信によって利用する場合に適用されます。「学校その他の教育機関」には、原則として塾や予備校など営利目的の教育施設は含まれません。また、保護者会、教職員会議などは学校内で開催されても「授業」ではありません。

Q2 利用にあたって、学校が届け出を行うのですか？

A 教育機関(学校等)の設置者(教育委員会、学校法人など)が、文化庁長官が指定している一般社団法人「授業目的公衆送信補償金等管理協会」(略称: SARTRAS)に届け出をすることが必要です。具体的な届け出の方法は、右図 SARTRASへの届け出 をご確認ください。

Q6 授業目的であれば、利用する分量などに制限はないのですか？

A 利用できるのは「必要と認められる限度」であり、客観的に見て授業に必要な部分、部数等に限られます。出版物の全部や、児童・生徒の全員購入が前提のドリル・ワークブックなどを公衆送信するなど、著作権者等の利益を不当に害する行為はできません。

Q3 なぜこの制度が始まったのですか？

A 「教育の情報化」の推進によって、あらかじめ収録しておいた授業動画を見学・生徒に送信するなど、多様な利用の仕方が求められるようになりました。その結果、許諾を得ることなく利用できる範囲を広げる一方、著作権者等の正当な利益の保護とのバランスを図るため、利用者が一定の「補償金」を支払い、それを権利者に分配するという仕組みが新たに作られました。

Q7 授業動画の中で教科書のページを映して配信したいのですが。



A SARTRASによる管理対象として利用できます。ただし、その授業に必要な部分に限られます。

Q4 補償金の徴収はいつから始まりますか？

A 2018(平成30)年5月に法改正が行われ、施行日は「公布の日から起算して3年を超えない範囲内において政令で定める日」とされていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により学校の休校措置等が行われる状況を受け、2020(令和2)年4月28日から前倒しで施行することとなりました。さらに、2020年度中は特例的に補償金を「無償」としています。(2021年度からはSARTRASによって補償金の徴収及び権利者への分配が開始される予定です。)

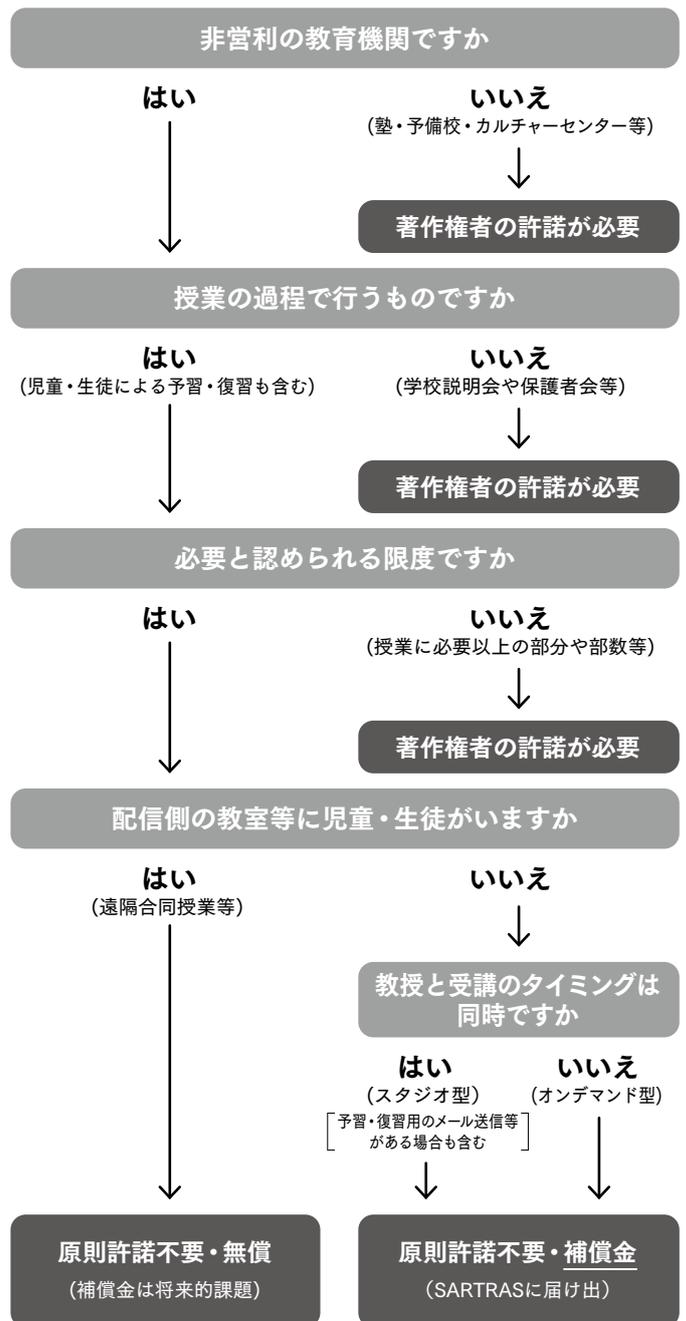
Q8 教育芸術社の「鑑賞用CD」や「指導用CD」の音源を配信したり、授業動画に利用して配信したりしてもよいでしょうか？

A 各CDに含まれる音源には「著作権」以外にも、その原盤に関わる「著作隣接権(原盤権)」という権利があります。「鑑賞用CD」の音源は、一般市場に流通している商品に収録されているものがほとんどで、海外や国内の著作隣接権の許諾を得て収録しています。そのため、一般商品の売上に影響を与える可能性があることから「権利者の利益を不当に害する可能性のある利用」として授業目的公衆送信に該当しないものもあられると考えられます。現在、それらの利用に関しては「鑑賞用CD」を制作しているレコード会社(ユニバーサルミュージック合同会社)へのご連絡をお願いしています。*

*教育芸術社ホームページ
<https://www.kyogei.co.jp/休業期間中の著作物利用について/>

一方、「指導用CD」や「合唱練習用CD」に収録されている音源は、そのために録音されたもので、教育芸術社が原盤権をもっているものが大半です。これらについては、現状、SARTRASでの許諾の範囲に含まれているものと考えられます。ただし、一部の音源はレコード会社(日本コロムビア株式会社)が原盤権をもっており、通常の授業を行えない期間のみ利用可能という見解をいただいています。

オンライン授業に関する著作権法上の扱い



Q9 教科書や「指導用CD」を使用して授業動画を作成しましたが、Wi-Fi環境のない家庭用にDVDに複製して渡してもよいでしょうか？

A SARTRASは「配信利用」に関する管理団体ですので「複製利用」は扱いません。ですから、本来はそこに含まれている著作物の権利者や管理団体(JASRACなど)の許諾、ならびに著作隣接権者(レコード会社など)の許諾を得て行う必要があります。しかし、オンライン授業の配信を受けられない児童・生徒に対してのみ、最低限必要な教材をDVDなどのメディアに複製して配布することは、「授業に利用するための複製」とみなすことができると考えられます。ただし、授業終了後には速やかに回収、破棄する必要があります。



今までできたこと

- ▼ 授業に使用するために著作物を紙にコピーして児童・生徒に配付する。
- ▼ 遠隔合同授業のために公衆送信(対面での授業を、遠隔地の別教室等に同時中継)する。

新たにできるようになったこと

- ▼ 遠隔合同授業等以外で、著作物をインターネット経由で送信(=授業目的公衆送信)する。

- 例 ① 予習・復習用に教員が他人の著作物を用いて作成した教材を、児童・生徒の端末に送信したり、サーバーにアップロードしたりする。
- ② あらかじめ録画したオンライン授業に関して、その授業で用いる著作物を児童・生徒に向けて公衆送信する。
- ③ その場に児童・生徒がいない状況でのオンライン授業に関して、その授業で用いる著作物を離れた場所にいる児童・生徒に向けて公衆送信する。

※ いずれも限定公開の形をとることが必要。

公衆送信とは？

放送、有線放送、インターネット送信、その他の方法により、不特定の者または特定多数の者(公衆)に送信することをいいます。一般的に、授業における教員等と履修者等間の送信は公衆送信に該当すると考えられます。ただし、校内放送のように学校の同一の敷地内(同一の構内)に設置されている放送設備やサーバー(構外からアクセスできるものを除く)を用いて行われる校内での送信行為は公衆送信には該当しません。〔改正著作権法第35条運用指針(用語の定義)より〕

SARTRASへの届け出

SARTRASホームページ「教育機関設置者による教育機関名の届け出について」<https://sartras.or.jp/todokede/>にアクセス。
↓
届け出資料一式(2点)をダウンロード。
↓
運用指針PDFの内容を確認し、Excel「教育機関名記入用紙」に入力する。
↓
入力後、「教育機関の届け出」画面にて上記Excelを添付し、教育機関設置者情報を入力し届け出を行う。
↓
SARTRASより受付完了メールが自動的に返信される。届け出の控えとなるので保存しておく。

※ただし、権利者の利益を不当に害さない範囲に限ります。



— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar

2021

ご案内

内容 スプリングセミナー2020で予定していた内容にて実施

出演者 〈司会〉藤原規生

〈作曲者〉同声合唱：アベタカヒロ、大熊崇子

女声合唱：土田豊貴、横山潤子

混声合唱：三宅悠太、木下牧子

〈合唱団〉八千代少年少女合唱団(指揮：長岡亜里奈)

女声合唱団 ゆめの缶詰(指揮：相澤直人)

Youth Choir Aldebaran(指揮：佐藤洋人)

開催方法 調整中

お問い合わせ 株式会社 教育芸術社

スプリングセミナー実行委員会

TEL 03-3957-1168 FAX 03-3957-1740

<https://www.kyogei.co.jp/>

※最新情報は、スプリングセミナーの

Facebookでも発信いたします。

<https://fb.me/kgsspringseminar/>



教育芸術社主催による「スプリングセミナー」では、2013年にスタートして毎春欠かさず新曲をお届けしてまいりました。これまで「スプリングセミナー」にご参加いただいた方々、また本セミナーに興味おもちいただいた方々に、厚く御礼申し上げます。

2020年春に開催を予定しておりました「スプリングセミナー2020」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止とさせていただきますでしたが、ここで初演を予定していた作品は、2021年3月開催予定の「スプリングセミナー2021」に発表することとなりました。楽譜発売・音源の配信等も、開催と併せての展開を予定しております。

次回開催の詳細に関しましては、感染予防を第一に優先しながら検討してまいります。

今号のヴァンでは、発表予定の作品名とともに、出演者からのメッセージをご紹介します。開催されることを信じて初演の日を待ちたいと思います。

● スプリングセミナーとは ●

教育芸術社が主催する新曲発表会で、合唱界で人気の作曲家たちが、演奏会やコンクール自由曲向けとして合唱曲を書き下ろします。発表するのは、同声・女声・混声の各2曲(全6曲)。各作品について作曲者、司会者、合唱団と学び、指揮者が指導のポイントを紹介するほか、作曲者自身による楽曲解説も行われます。セミナー終了後には「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーを行います。

藤原規生(司会)

2013年3月よりスタートした「スプリングセミナー」。私は司会者として、毎年6曲の素晴らしい作品をご紹介させて頂き、作曲家の皆様の遥かなる思い、その作品の息づかいをお届けし、皆様と共にその誕生を喜び合ってきました。

2020年も、6人の素晴らしい作曲家による作品が全国の皆様と出会うのを楽しみにしていました。発表は2021年春となりますが、大いなる期待感を持ってお待ちいただければと思います。

厳しい冬を超えるからこそ、生命力溢れる季節を喜び合うのですが、今年は長い冬となりました。見つめ続けた悲しみの向こうに、命の尊厳としての学びがあります。

訪れる本当の春の喜び、歌と共に存分に味わいたいと思います。



藤原規生(ふじはら・のりお)

国立音楽大学声楽学科卒業。ヴァチカン国際音楽祭では2017年より西本智実指揮、イルミナート合唱団の合唱指揮を務め、2019年はサンピエトロ大聖堂での《ローマ法王代理ミサ》で、グレゴリオ聖歌「オラショ」指揮を担当。
洗足こども短期大学・国立音楽大学附属高校講師、日本合唱指揮者協会副理事長、オペラアーツ振興財団事務局長。



八千代少年少女合唱団

(指揮：長岡亜里奈)

同 声

もう合唱は出来ないのではという落ち込む気持ちを奮い立たせてくれたのは、子どもたちでした。中学生の4名がそれぞれの家庭で歌い、編集した合唱動画を配信してくれたのです。指導者より動画配信、現在は音楽理論の勉強、ボディーパーカッション等を経て、ようやく歌うことが可能になりましたが、動画の歌声を聴いた時に、いかに音楽が人の心を和らげ、豊かにするかを再確認しました。困難を乗り越えてこそ、また新しい道が開けると信じ、今後も合唱を通して「仲間の大切さ」を、そして「子どもの無限な可能性」をさらに伸ばし、歌うって楽しい!と思える演奏ができるように指導を続けていきたいと思っています。



長岡亜里奈(ながおか・ありな)

ソプラノ、ヴォイストレーナー、指揮者。国立音楽大学声楽科卒業。2007年、イタリアへ渡り研鑽を積み、2010年にはモナコ大聖堂にて開催されたモーツァルトレイエム公演にてソリストを務めた。近年は、中高生オーケストラの指揮も行っている。
森 靖博、平田典之、田手道子各氏に師事。国府台女子学院専任講師。

八千代少年少女合唱団

1977年に結成。国内外で多くの演奏会を実施。2000年にハンガリーで行われたカンテムス国際合唱コンクールにおいて金賞を受賞。千葉県教育委員賞や40年にわたる活動が評価され、2017年には八千代市市民栄誉賞を受賞。その他、音楽教科書準拠CDや新曲の合唱曲のレコーディングを行うなど、少年少女合唱団を代表する合唱団として活躍を続けている。

アベタカヒロ

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。第20回かぶらの里童謡祭作曲公募で最優秀賞を受賞。

合唱と童謡を軸に幅広く活動中。横浜市芸術文化教育プラットフォームにおける小学校での合唱制作授業は毎年好評を博している。教育芸術社より合唱曲「友達の友達」、「うち 知ってんねん」他発表。一般社団法人日本童謡協会理事。



『すてきな友よ』

くらたこのみ 作詞／アベタカヒロ 作曲

同声

主に高校生へ向けたメッセージとして書かれながら、10数年ものあいだ未発表のまましまっていたというこの詩には、様々な困難を避けては通れない人生というものにおいて、自分の心にある「強い愛」をもって明るく優しく、正しく生きてほしいという願いがこめられているのだそうです。この「強い愛」は、表現のしかたに違いがあるだけで、たとえ小さな子どもにもしっかりと心の奥底にあると思っています。私はこの詩に触れた時、すぐに作曲したいと思いました。子どもたちが歌うからこそ伝わるものがあるのではないかと。ひょっとしたら今の世界に必要な大きな力が歌声に宿るのではないかと信じているからです。

『いる』

谷川俊太郎 作詞／大熊崇子 作曲

同声

「いる」は、谷川俊太郎詩集『すき』の一篇です。4連15行から成るひらがな詩です。

存在そのもの、そして他のものと繋がっていることのすばらしさを味わえる素敵な詩です。

私が感銘を受けたこの詩の最後の連を引用します——だれかがどこかにいるのっていいね たとえとおくにはなれていても いるんだ いてくれるんだとおもうだけでたのしくなる——。読後、幸せな気持ちになります。勇気づけられます。

今、いろいろな人に会えなくてもオンラインで繋がっていることで安心感が得られるこの状況にも通じるものがあるような気がいたします。

スプリングセミナー2021が無事に開催されることを心より願っております。



大熊崇子(おおくま・たかこ)

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。昭和60年度笹川賞合唱曲部門第1位。

「さくら」「予感」「じゃあね」など合唱作品多数。昨年度「わたしは こねこ」など過去5回NHK全国学校音楽コンクール課題曲を作曲。また現在、東京藝術大学オペラ研究部でバレエピアノも担当している。日本作曲家協議会会員。

土田豊貴(つちだ・とよたか)

1981年、東京都生まれ。桐朋学園大学音楽学部・カレッジディプロマ作曲科修了。第21回朝日作曲賞受賞(合唱組曲)。第87回NHK全国学校音楽コンクール・高等学校の部課題曲の製作を担当。第3回東京国際合唱コンクール・ユース部門の課題曲制作を担当。これまでに作曲を法倉雅紀、鈴木輝昭、ピアノを三輪郁の各氏に師事。



『夕暮 -女声合唱とピアノのための-』

谷川俊太郎 作詞／土田豊貴 作曲

女声

今回作曲をした谷川俊太郎さんの詩は、「夕暮」を通して読み手の心の中に語りかけてきます。その世界観を大切に、美しき夕暮の風景を思い描きながら、自分の中にある夕暮に問いかけ、語りかけるような作品を目指して作曲をしました。

2020年の年始より、初演の労をお取りくださる相澤直人さん、ゆめの缶詰の皆様と練習を重ねてまいりました。残念ながらスプリングセミナー2020は中止となってしまいましたが、改めてスプリングセミナー2021では、ぜひ多くの皆様に「夕暮」を含む6作品を存分にお楽しみいただければ幸いです。



女声合唱団 ゆめの缶詰

(指揮: 相澤直人)

女声

この時期をよい“インプット”の機会と捉え、現在はオンラインで、普段はできない和声や楽典、楽式などの講義をしています。「裏付ける知識」に興味を持ち、学ぶことによってより本物に近づいた表現になるのではないのでしょうか。

来年3月には、このようなインプット期間を経て、より曲の魅力が伝わる演奏をお届けしたいと思います。土田豊貴さんの「夕暮」、横山潤子さんの「ふゆはたまもの」、どちらも流麗なフレーズ、ハーモニーが非常に美しい曲。これらの曲に思いがけず長い期間に亘って取り組めることは幸せでもあります。ぜひ多くの皆さまにお聴きいただき、拡がりますようお願いしております。



相澤直人(あいざわ・なおと)

東京藝術大学音楽学部作曲科及び指揮科出身。10以上の団体に常任指揮者を務める。また、作曲家としても活躍中で、多くの作品が出版され愛唱されている。著書に「合唱エクササイズ アンサンブル編」など。JCDA日本合唱指揮者協会副理事長、東京都合唱連盟理事。東京藝術大学及び洗足学園音楽大学講師。アイザワノーツ合同会社代表。

女声合唱団 ゆめの缶詰

「美しい流れ、伝わる言葉、共感できる表現」を目標に2015年発足。2018年11月に初の単独主催演奏会「まんてんのほし-名田綾子作品個展-」を開催し、盛況のうちに幕を閉じた。また、これまでに教育芸術社主催Spring Seminarへモデル合唱団として出演の他、第73回、74回東京都合唱コンクール室内合唱の部 金賞受賞。



横山潤子(よこやま・じゅんこ)
東京藝術大学作曲科卒業、同大学院修了。おもに合唱・室内楽の分野で活動中。
【主な作品集】『横山潤子作品集 同声編1・2』/合唱曲集『ここに海があつて』『たましいのスケジュール』『きんぼうげの日々』『笑いのコーラス』『妖精の市場』『青のアルバム』『ひとつぶの種子』『ドゥーニのヴァイオリン弾き』/編曲集『時代』 ほか

『ふゆはたまもの』

覚 和歌子 作詞/横山潤子 作曲

女声

春夏秋冬それぞれの季節生まれの人に贈られた《パースデイカード》という作品が、覚 和歌子さんの詩集『はじまりはひとつのことば』の中にあります。春夏秋冬というわけなので4篇から成っており、そのうちの〈ありったけの夏〉を2018年に、そして今回はその姉妹品のつもりで「ふゆはたまもの」を選びました。雪の白、巡る季節としての冬をうたったものですが、この「冬」は、あるいは「人に訪れる厳しいとき」と読むこともできるだろうか？ とずっと考えていました。そして2020年、世の中は今…。

「けしきにはじまりをおもいださせ/ここにぜろをとりもどし/ふたたびいのことから/せかいをかきかえるためのいろ」

『ひとめぐり-混声合唱とピアノのための-』

覚 和歌子 作詞/三宅悠太 作曲

混声

「死」について考えていた自分は、記憶に蘇る15歳の頃の自分と対峙する—そしていつの間にか、「生きること」を考えていた—「ひとめぐり」と名付けられた覚 和歌子さんの詩に出逢った時、まるで一本の映画を見終えた時のような密度の濃い感覚、感動に包まれました。そして、自分の高校時代や大学時代を振り返り、この詩に描かれる世界観と感覚を同じくしていたことを思い出しました。

この作品を作曲する機を与えてくださった教育芸術社、命を吹き込んでくださる合唱団の皆様、そしてお聴きくださる皆様に、心から感謝致します。

三宅悠太(みやけ・ゆうた)

東京藝術大学作曲科卒業、同大学院修了。奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第1位、第79回日本音楽コンクール作曲部門(オーケストラ作品)第1位。管弦楽・室内楽・舞台音楽・合唱作品ほか多岐に渡る作編曲を手がけ、2016年にはNコン高校の部課題曲「次元」の作曲を担当。聖心女子大学、都立総合芸術高校各講師。



木下牧子(きのした・まきこ)

東京生まれ。管弦楽から吹奏楽、ピアノ曲までその活動は幅広く、特にヴァリエティ豊かな声楽作品は抜群の人気を誇る。今までに、毎回異なる編成で5回の作品展を開催、とりわけ2019年に開催したオーケストラ作品展は大好評を博した。東京藝術大学作曲科首席卒業、同大学院修了。日本音楽コンクール作曲部門(管弦楽の部)入選。日本交響楽振興財団作曲賞入選。三菱UFJ信託音楽奨励賞受賞。公式サイト <https://kinoshitamakiko.com>



『冬と銀河ステーション 混声合唱とピアノのための』

宮沢賢治 作詞/木下牧子 作曲

混声

久しぶりに、若者向けの混声合唱曲を作曲してみました。テキストは宮沢賢治の「冬と銀河ステーション」。賢治の時代、実際に走っていた岩手軽便鉄道を、夜空を行く銀河鉄道に見立て、冬の満天の星空を賑やかな市に見立てた、幻想的で生命力あふれる詩です。この世界観は未完童話「銀河鉄道の夜」のモチーフになりましたが、「銀河鉄道の夜」が「死」という重いテーマを扱っているのに対し、「冬と銀河ステーション」はファンタジックで生き生きとした情景を描いた作品です。真冬の澄み切った空気ときらめく満天の星を、豊かなハーモニーとキラキラと弾(はじ)くようなピアノのタッチで描いてみました。スプリングセミナー2020は、残念ながらコロナのために中止になってしまいましたが、2021年は、和やかな雰囲気の中で新曲をお届けできることと、楽しみにしています。



Youth Choir Aldebaran
(指揮:佐藤洋人)

混声

人々が集い心置きなく声を合わせることができなくなって半年が経ちました。愛する合唱を通して、人と心を通わせたい、合唱活動を発展させ、文化を残していきたいという気持ちが日に日に強くなっているのを感じています。いま、私の合唱団では、オンラインによる練習や、録音を重ねて編集するリモートコーラスなどの新しい分野に取り組んでいます。不自由なこともあります、新たな可能性も感じています。ステージで歌えることの有り難さを改めて思い知らされた今、以前に戻っていくのではなく、その先の音を見つけていきたいと考えています。



佐藤洋人(さとう・ひろと)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。World Youth Choir 2009日本代表。Tokyo Cantat 2012「第3回若い指揮者のための合唱指揮コンクール」第1位。現在、武蔵野合唱団、Youth Choir Aldebaran、早稲田実業学校音楽部など多数の合唱団で指揮者を務める他、東京混声合唱団にて副指揮を務める。JCDA日本合唱指揮者協会会員。21世紀の合唱を考える会合唱人集団「音楽樹」幹事。

ユースクワイア アルデバラ
Youth Choir Aldebaran

「未来をつくる合唱団になりたい」という願いから2016年に生まれた混声合唱団。高校生~35歳のメンバーで構成され、音楽監督兼指揮者に栗山文昭氏、指揮者に佐藤洋人氏を迎える。様々な作品を通して合唱の基礎を学び、若いエネルギーにあふれる合唱団を目指して活動中。これまでの主な活動は、自主公演主催、山梨や鳥根への演奏旅行、CD収録、スプリングセミナー2019出演など。



『1ねん1くみ1にちのうた』市内音楽会

授業者に 訊く

1年間の授業実践 について

金丸春香先生は「思いをもって歌うことが好きになる 低学年の歌唱指導」というテーマのもと、2018(平成30)年度、1年生の学級担任として音楽の授業に取り組んでいらっしゃいました。設定されていた歌唱の年間指導計画に沿って実践された学習を振り返ります。



金丸春香先生と石井ゆきこ先生

歌唱の年間指導計画 [2018(平成30)年度 1年1組]

	教材	歌唱の年間計画
4月	うたでさんぽ ぞうさんのさんぽ	○みんなで声を合わせて元気よく歌う。 ・しっかり声を出して歌えるように楽しく歌唱に取り組ませる。
5月	てとてであいさつ ひらいたひらいた さんぽ なまえあそび	
6月	かたつむり/じゃんけんぼん	○きれいな声で歌う。 ・発声の基礎を指導する。息の吸い方・吐き方、頭声発声の実践など。
7月	みんなであそぼう しろくまのジェンカ/ぶんぶんぶん ことばでリズム うみ	
9月	どんぐりさんのおうち なかよし	○市内音楽会に向けた歌づくりを通して、歌詞の内容を意識して歌えるようにする。 ・曲作りを通して、「歌詞の内容を考えながら歌う活動」に取り組ませる。
10月	おどる こねこ ひのまる	
11月	はる なつ あき ふゆ きらきらぼし シンコペーテッド クロック	○思いをもって歌う。 ・入学式での歌の発表を見据え、やわらかい声で歌うことや響く声を出すことを意識させ、歌唱の指導を行う。
12月	おとさがし ほしぞらの おんがく さんちゃんが/おおなみなみ	
1月	おちゃらかほい やまびこごっこ	
2月	とんくるりんばんくるりん こいぬの マーチ ラデツキー こうしんきょく	
3月	うたいつごうにほんのうた みんなでのしく	

今回の「授業者に訊く」では、1年間の授業実践記録(資料や映像)をもとに対談を行いました。ご紹介するのは、藤沢市立駒寄小学校の1年生。映像を拝見し、子どもたちのいつも元気いっぱいな様子と、1年間を通して変わっていく声が印象に残りました。子どもたちの生活や他教科と音楽とをつなげる指導の工夫について金丸春香先生に伺いました。

授業者: **金丸春香** (藤沢市立駒寄小学校 教諭)

聞き手: **石井ゆきこ** (港区立芝小学校 主任教諭)

※この対談取材は、2020(令和2)年1月に行われたものです。

1年間で育てる「音楽との向き合い方」

1年生には 「とにかく楽しい！」環境を

石井: 本日は、2018(平成30)年度に先生が担任された1年生の取り組みを伺いたいと思います。金丸先生は駒寄小学校に着任して、どのくらいたちますか？

金丸: 2019(令和元)年度で5年目になり

ます。前年度は1年生、現在は5年生の担任をしています。

石井: 駒寄小学校に音楽専科の先生はいらっしゃいますか？

金丸: 私が着任したときはおりましたが、今年はおりません。現在5年生は学年で交換授業をしていて、私は音楽の授業を受け持ち、学年の先生方と連携しながら学年を指導しています。

石井: スタートカリキュラムとして、先生ご自身が工夫されたことはありますか？

金丸: 入学したばかりの子どもたちの中には、新しい環境に馴染めず不安を感じている子もいるので、音楽でもなるべく体を動かす活動を取り入れ、「とにかく楽しい！」と子どもたちが思えるように心がけました。

石井: 音楽には歌遊びも取り入れていましたね。

金丸: はい。色々な活動を取り入れています。1年間指導してみて、特に印象に残っている教材は『おどる こねこ』です。「こねこはどんな踊りを踊っているのかな？」と子どもたちに投げかけたところ、体をゆらしながら爪をとぐ猫やバレエのように踊る猫、ピョンピョンはねてウサギのように踊る猫もいました。実際にみんな、音に合わせて体を動かしたり歌ったりすることが得意で、楽しそうな様子でした。

石井: 1年生の最初のうちは、そのように一人一人のアピールを授業に取り入れていくことにより、教師と子どもが繋がっていきます。次に、子どもどうしのつながりをもたせることが必要ですが、音楽の授業でつながりを意識させる工夫はありましたか？

金丸: 教室の使い方を工夫していました。低学年の指導では、互いの顔を見たり近くで友だちの声を聴いたり、子どもどうしでコミュニケーションをとりやすくすることが特に大切だと感じています。歌唱では、音取りするときは自分の席で、歌えるようになったらギュッと集めるなど、状況に応じて配置を変えるようにしました。子どもどうしの距離感が縮まるように、リズム遊びや歌遊びも取り入れたことも、子どもたちにとってよい影響があったと思います。

言葉掛けや指導の判断は 子どもの様子を見ながら

石井: 低学年と高学年では指導方法に違いがありますか？

金丸: 言葉を選んで声を掛けるようにしています。低学年を指導してみて、大人の意図することを正確に伝えるのは難しいな、としみじみ思いました。生活の授業で花の植え方を教えていたときのことで、私が「土に肥料をかけましょう。1か所に集まらないように少しずつかけてね。」と言っても困ったような反応をした子が



○ 石井ゆきこ(いしい・ゆきこ)
港区立芝小学校 主任教諭



『おどる こねこ』の授業の様子

いたのですが、その場にいた新入生サポートのベテランの先生が「土にふりかけをかけるんだよ!」と言ったら、パッと表情が明るくなって楽しそうに肥料をかけ始めたんです。それを見て、たとえることが効果的だと学びました。それから、上半身を脱力させたいときは「ゾンビ!」など、音楽の授業でもたとえることが増えました。高学年でも使えますが、やはり1年生の反応は格別ですね(笑)。

石井: 1年生はそれで通じますし、なりきってくれますよね(笑)。

金丸: 擬音語も効果的でした。低学年は高学年に比べて教科書で扱う内容が少なく、比較的ゆとりがあって指導にも幅をもたせることができるため、教師としてはその点が楽しかったです。

石井: 1年生の場合、1つの教材で、いろいろなアプローチができると思います。

金丸: ここにつなげよう、これもやってみよう、子どもたちの様子を見ながら考えることができました。それから、低学年の子どもたちはCDの伴奏よりも生のピアノ伴奏やギターのほうがうれしいようなので、つたなくても簡単なコードだけでも自ら弾くことを大切にしていました。そうすることで歌唱に積極的でない子ども、一緒に歌ってくれたんです。

石井: 先生と一緒に音楽をするという環境が、子どもにとっていいのでしょうか。1年生は、教科書に載っている曲も童謡も、なんでも喜ぶますからね。

金丸: そうなんです。とてもかわいいです。

石井: 教師は教材を選ぶときに、「子どもははやりの歌が好きだろう」と思い込まないほうがいいと、いつも思います。私が勤務する小学校の校歌の作詞者は高野辰之さんで、七五調の歴史を感じる歌詞ですが、子どもたちはその古めかしさが好きなようです。「校歌は『ふるさと』を作詞した高野先生が作ったんだよ」と伝えて教えていますが、みんな喜んで歌っています。

金丸: 子どもたちもうれしいでしょうね。

担任であることを生かして音楽と他教科とをつなげる

石井: 金丸先生の授業資料や映像から、1年間の指導の見通しや、時期ごとに育てたい内容と意図がよく分かりました。「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる」ことが求められていますが、金丸先生の授業を拝見して、担任だからこそ他教科、そして生活や社会と音楽とをつなげていけるのではと思いました。

金丸: 以前勤務した学校で専科を担当していましたが、正直、他教科の学習状況をあまり把握できていませんでした。担任をしていると、音楽と結び付けられる他教科の内容をたくさん見つけることができます。音符の学習は算数に、歌詞の読み取りは国語に通じていますし、教科書に共通の人物や語句が出てくることもよくあります。諸外国の音楽は社会と切り離せません。

石井: 歌唱の『はる なつ あき ふゆ』を、図工とつなげた活動がありましたね。図工の時間に歌詞のイメージを絵にして、音楽の時間にその絵を思い浮かべながら、気持ちを込めて歌うというものでした。

金丸: 友だちと一緒に絵を描く活動を取り入れたかったのですが、メインの絵を描くグループ、背景を描くグループに分かれて、それぞれ共同で描く形をとりました。「なつ」の場合は、あるグループは「ごぶんともぐる おおきなくじら」、またあるグループは「きらきらの たいようと なつの うみ」と書かれたカードを手に、その言葉からイメージした絵を描きます。全グループの絵が完成したところで「実は組み合わせられるようになってるよ」と種明かしをし、みんなで組み合わせてから教室の後ろに飾りました。しばらくして行った『はる なつ あき ふゆ』の学習で、自分たちの描いた絵との関わりに気づいたとき、子どもたちの目が輝いて見えました。図工と音楽、どちらもよい学びになったと思います。

石井: タイミングもよかったですね。

金丸: 4月の入学式では、2年生が在校生代表として『たんぼぼ』を歌うことになりました。ちょうどその頃、子どもたちはビオラを育てており、子どもたちの体験と音楽が結びついたことを感じられました。

石井: 生活とつながることで、低学年はより実感をもって歌えるのでしょうか。金丸先生が選ばれる教材は、『たんぼぼ』も『君をのせて』も中学年や高学年が歌うような曲ですが、発声法につなげてうまく活用されていると思います。

金丸: 11月の藤沢市の音楽会では、『翼をください』の1番を歌いました。サビで高音が美しく出せて、のびやかなテンポの曲を探した結果です。私は頭声のやわらかい声が好きなので、子どもたちにも



○ 金丸春香(かねまる・はるか)
藤沢市立駒寄小学校 教諭



左：『はる なつ あき ふゆ』を取り上げた図工の授業。なつの背景「きらきらの たいようと なつのうみ」を描くグループ
右：メインのくじらと背景を合わせて完成

「きれいな声っていいな」と感じてほしいと思っています。

石井：1年生がきれいな歌声に憧れをもつために、どのように授業を進められたのですか？

金丸：1学期の終わりまでは「表情はこうするといいね」という指示ぐらいで、楽しく歌うことを中心に進めました。音楽会への参加が決まってからは「人に聴いてもらうためにはどんな声がいいかな？」という投げかけを始めました。私は声楽を学んできたので、やわらかく出した声とぶっきらぼうに出した声の2種類を聴かせて「どっちの声がよいと思う？」と問いかけたり、子どもどうして歌を聴き合ったときに意見を出させたりして、「この声がきれいだな」と思えるように時間をかけて取り組みました。

石井：授業の映像では、発声をしている場面がよくあり、1年生でもいろいろ指導されているのだなと思いました。また、体の動きを使って発声させているところも印象的でした。リラックスしてよい声が出ていますね。

金丸：発声の指導は「あくびの声を出してみようね」など、気負わないような指示を意識しています。また体を動かすことで体の使い方を知り、子どもたちが自然と学んでくれればよいと思っています。

『1ねん1くみ1にちのうた』

石井：藤沢市の音楽会では『翼をください』の前に、金丸先生が作られた『1ねん1くみ1にちのうた』を発表されました。どのような経緯でこの曲をつくられたのですか？

金丸：以前から、低学年を担当したら子どもたちのために曲をつくってみたいと考えていました。そのような中で1年生の担任になり、さらに音楽会への参加が決まったことがきっかけになりました。1年生が大きなホールで発表することを考えると、童謡のようにくり返しの多い曲では見せ場をつくるのが難しく、起承転結

があって素敵だなと思う既存の曲だと、難しくてなかなか歌えません。そこで、子どもたちがふだん使っている言葉で生活に密着した曲をつくろうと思いました。

石井：子どもたちにどのような投げかけをして、歌詞をつくっていったのですか？

金丸：まずは「曲をつくろうと思っているけれど、みんなはどうか？」と、気軽な雰囲気を始めました。次に「学校の代表として発表する歌だから、テーマを学校にするのはどう？」「入学してから学校でどんなことをしましたか？」と投げかけて、子どもどうして話し合いをさせました。すると「ひらがなを勉強した」「算数で足し算をやった」など、学習に



『はる なつ あき ふゆ』の歌詞の内容を考えながら歌う活動



発声を身に付け、思いをもって楽しく歌う子どもたち

関する意見が多かったので、教科ごとに歌詞を考えました。

石井: この曲は1年生の一日の流れがそのまま、朝、1時間目、2時間目……と続いていきますね。私たち教師の視点だと一日は流れるように過ぎ去りますが、この歌を聴いていると「1年生の一日って、たくさんの出来事があるんだな」と感じて、楽しい歌だと思いました。曲の中では、教科によって拍子も変わりますね。それぞれの構想はあったのでしょうか？

金丸: 冒頭は元気に声を出すことを目的としました。[こくご]では掛け合いを楽しみ、[さんすう]はクールダウンできるようなおもしろさを前面に。[たいいく]では大きな声が出せるよう激しくしています。[おんがく]はガラッと印象を変えたかったので、3拍子にしました。ポイントとなる歌詞や体の動きは子どもたちが考えたものです。[さんすう]の「きゅうひく はちは？ 4！ え?!」に合わせた振り付けも子どもたちが考えました。(17ページ写真参照)

石井: 子どもたちは元気いっぱいに歌っていましたね。長めの歌ですが、どのような指導をされましたか？

金丸: 私が歌って手本を示し、1時間ごとに教科のまとまりを1つずつ進めていきました。

石井: 私がこの曲を指導するとしても、分けて指導すると思いました。この曲をつくるにあたって、ご苦労はありましたか？

金丸: 曲がある程度形になって子どもたちと実際に声を出して練習してみると、想定していなかったことが起こりました。1年生には歌にくい歌詞や音程、リズムの発見です。また、高音に「エ」や「ウ」の母音がくると歌いにくいので、「ア」など開いた母音を配置

しました。[さんすう]では、子どもたちと歌って試しながら発音しやすい数字を決めて配置するなど、みんなが歌いやすい曲にするのが大変でした。

石井: 低学年なりのつまずきが、実際に一緒につくる過程で見えてくるのですね。『1ねん1くみ1にちのうた』を発表して、いちばん成果が上がったなと感じたのはどのような点でしょうか？

金丸: たくさんありますが、子どもたちの歌に向き合う姿勢が最も変わったと思います。1学期から大きな声で元気よく歌っていましたが、発表の後は他の曲でも歌詞についてよく考え、たくさんの意見を出せるようになりました。音楽や歌により関心をもってくれたと感じます。2年生になった今でも、廊下で会うとこ

の歌を歌ってくれるんですよ。

石井: 音楽に対する意欲をもち続けているのですね。今回、『1ねん1くみ1にちのうた』の楽譜が掲載されますが、「こんなふうに歌ってほしい」と先生方に伝えたいことはありますか？

金丸: クラスに合わせて、ぜひ子どもたちの愛着が湧く歌詞に変えて歌っていただきたいと思います。[さんすう]の中の「いいね!」という歌詞は、1年1組で授業中に答え合わせをするとき「いいね!」というルールにしていたことから取り入れました。また、帰りの会では毎日じゃんけんをしてから帰るので、「かえりのかいで じゃんけんばい!」という歌詞を入れ、指揮の私と子どもたちで毎回本気のじゃんけんをしていました。ですから、言葉を変えたり、給食の時間を加えたり、算数が嫌いであればなくしたり(笑)、「1くみ」を「2くみ」「3くみ」に変えたりして、そのクラスに合わせて自由に歌ってほしいです。子どもたちが「ぼくたちみんなでこの演奏を作り上げたんだ!」と思えることはとても輝かしい大切な経験になると思うので、先生と子どもたちと一緒に考えて、演奏を作り上げる過程も楽しんでいただきたいです。

石井: すてきですね。金丸先生と子どもたちのアイデアを、芝小学校にも持ち帰りたいなと思いました。ありがとうございました。

校長先生より

細川淳子 先生
藤沢市立駒寄小学校 校長
[取材当時]
藤沢市立石川小学校 校長
[2020(令和2)年度～]



1981年に創立した本校は、年間を通して1組グループ、2組グループ、3組グループに分かれて「たてわり活動」に取り組んでおり、教室もたてわりを意図した配置にしています。

学校教育目標「自ら考え、判断し、行動できる子」のもと、保護者や地域

の方たちに支えていただきながら、教育活動を進めています。特に、あたたかい「あいさつ」「聴き方」「ことばづかい」を毎日の生活で意識し、全職員、全校児童で心と力をあわせて「元気 やる気 優しいいっぱい えが おあふれる駒寄小学校」をめざしています。

その中でも金丸先生はいつもとびっきりのえがおで子どもたちに接し、音楽を上手にいかしたあたたかい学級づくりに努めています。

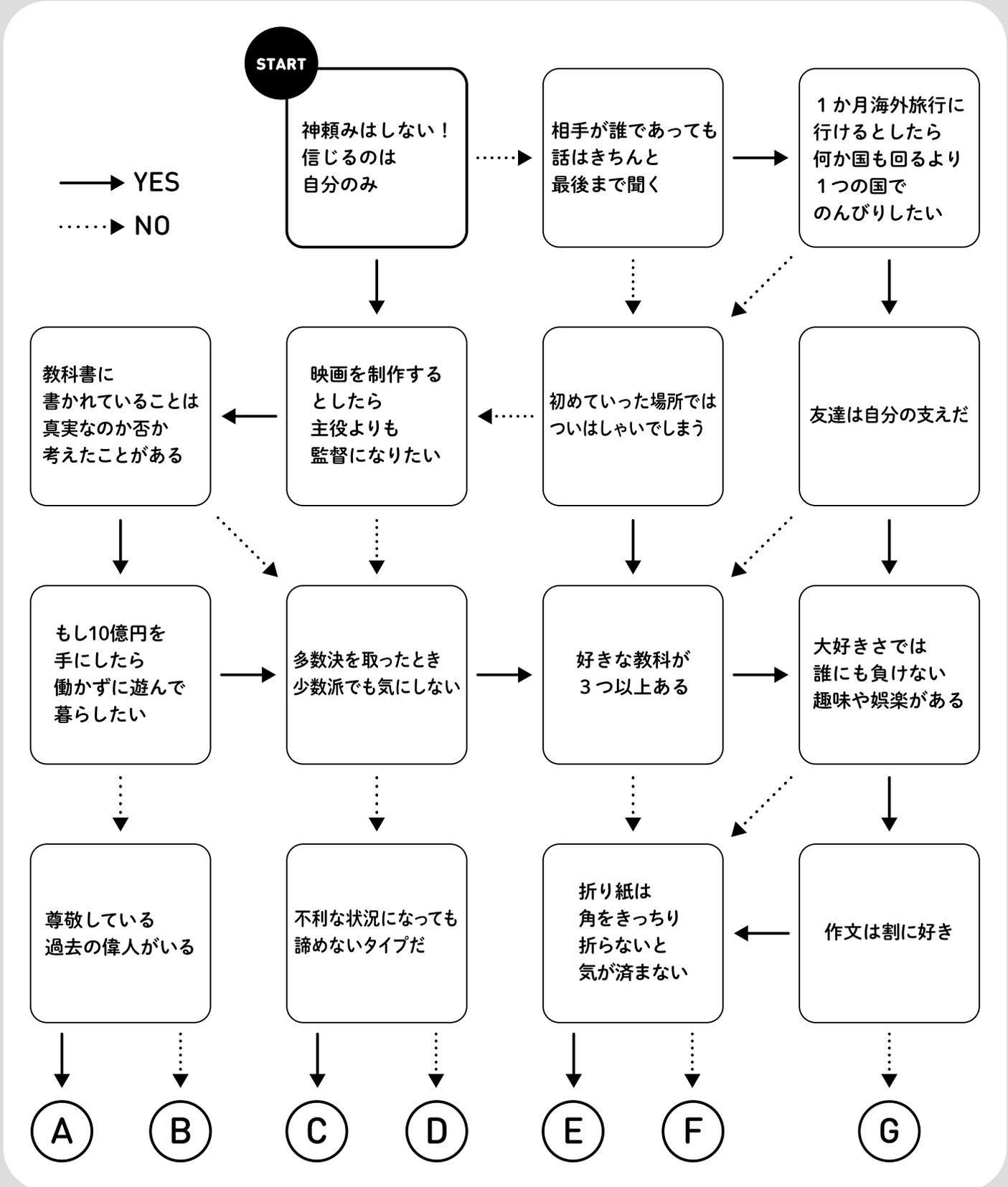
音楽診断

第9回 フランスの作曲家編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第9弾。今回のテーマはフランスの作曲家です。フランス出身の7人の有名な作曲家の中から、あなたに似ている人物をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生
Text = Haruo Yamada



A 情熱的に信念を貫き、ピンチをチャンスに変える ベルリオーズ (1803年~1869年)

時代を超越した、突然変異の天才。医学生だったベルリオーズは、作曲への情熱を抑えきれず、医学を捨て、22歳でパリ音楽院に入学した。人気舞台女優に熱烈な片思いをするが、あえなく失恋。そこで彼女の気を引くために『幻想交響曲』を作曲。自らの恋愛体験を交響曲に持ち込んだ画期的なこの作品は大成功を収め、彼はパリの音楽界の寵児となった。彼はピアノさえ十分に弾けなかったというが、そんな欠点がかえって既成概念にとらわれない彼独自の音楽を生み出したともいえる。



C 器が大きく細やかな心配りもできる ラヴェル (1875年~1937年)

「音の錬金術師」と呼ばれることがあるほどの管弦楽法の大家。母親がスペインのバスク系であったことから、スペインに大いなる憧れと愛着を抱き、スペインと関係の深い作品を少なからず残した。スペイン舞曲に由来する『ボレロ』もそんな曲の一つ。『ボレロ』は、主題の展開や転調もなく、楽器の組み合わせによる音色や音量の変化のみによって、聴き手を魅了する。まさにラヴェルの天才的な管弦楽法が示された作品である。



E 多ジャンルで活躍する国際派 サン=サーンス (1835年~1921年)

2歳半でピアノを弾き、3歳で作曲を始め、10歳でリサイタルを開くなど、神童として注目された。そのほか6歳でラテン語を読み始め、天文学、考古学、占星術、魔術にも興味をもったという。彼は作曲家兼ピアニストとして旅の多い人生を送り、異国趣味的な作品を好んで書いた。神童は86歳まで長生きし、若い頃には革新的な作曲家とされていたが、後年は古典主義者、保守主義者とみなされるようになってしまった。2021年が没後100年にあたる。残した作品に『動物の謝肉祭』や歌劇『サムソンとデリラ』などがある。



G オリジナリティ抜群の革新者 サティ (1866年~1925年)

その独特な世界観に基づく音楽によって、20世紀末に静かなブームとなった。彼の作品のなかで最も人気が高い『ジムノペディ』は、古代ギリシャの神を讃える祭典における裸の踊りを意味する。ドビュッシーと交友があり、彼の自由で独自の音楽は、ラヴェルや「六人組」*など後の世代の作曲家へ大きな影響を与えた。同じ旋律が840回繰り返される『ヴェクサシオン』はミニマル音楽の先駆けであり、『家具の音楽』は環境音楽へとつながっていく。

*「フランス六人組」と呼ばれる、フランスの作曲家6人(デュレ、オネゲル、ミヨー、タイウフェール、プーランク、オーリック)のグループ。音楽観は各人各様で、20世紀前半に活躍した。



B 自由さと柔軟性もち魅力的 ドビュッシー (1862年~1918年)

印象主義音楽の先駆者と呼ばれることがあるが、ドビュッシー自身は印象主義に分類されることを嫌ったという。マラルメの詩からインスピレーションを受けて1894年に書き上げられた『牧神の午後への前奏曲』は20世紀音楽への道を切り拓き、全音階(半音を含まない6つの全音からなる音階)を用いるなど、独創的な和声法と管弦楽法で、近現代音楽への扉を開いた。アフリカ音楽やパリ万国博覧会で聴いたジャワの音楽(ガムラン)にも影響を受けていた。



D 完璧主義の頭脳派 デュカス (1865年~1935年)

パリに生まれ、パリ音楽院でギローに学び、ワーグナーの影響を受け、ドビュッシーと親交があった。歌劇『アリアーヌと青ひげ』、バレエ音楽『ラベリ』、『交響曲ハ長調』などの作品を残しているが、彼の最も有名な作品は、1897年に作曲された、ゲーテの詩に基づく交響詩『魔法使いの弟子』である。晩年はパリ音楽院教授として後進の指導にあたり、門下生にはメシアンもいた。自らに厳しく、数多くの曲を書いたものの、遺されている作品は少ない。



F 才能があるけど努力も惜しまない ビゼー (1838年~1875年)

早くから音楽の才能を示し、9歳でパリ音楽院に入学。17歳で交響曲を書き、19歳でローマ大賞を受賞。1863年作曲の『真珠採り』でオペラ作曲家として認められる。1872年に劇付随音楽『アルルの女』を作曲。最後のオペラ『カルメン』の初演は成功を収めることができず、その3か月後、ビゼーは36歳の若さで急逝。しかし彼の死後、『カルメン』は世界中の歌劇場で最も人気のあるオペラの一つとなった。ビゼーのいちばんの魅力はその溢れ出る旋律の美しさにあるといえる。



山田治生(音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ〜大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人〜ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の愉しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。

編集後記

あらゆる場面で「多様性」という言葉を耳にする昨今。巻頭インタビューでは、生命科学の研究を長年続けてこられた医学博士・西川伸一先生に、人間が生来もつ多様な能力、そして互いの違いを認め合うことの大切さについてお話を伺いました。

「一度生まれたらもう二度と同じゲノムの人間は出てこない」。その言葉の意味を考えたとき、一人一人がどれだけ貴重な存在か、多様性とは何なのか、ストンと腹に落ちました。

特集では、全日本音楽教育研究会・事務局長の小松康裕先生が調査された各地域の実践をご紹介します。長期休校やオンライン授業など、これまでにないことが続く学校現場。こうした状況下での先生方の取り組みを目の当たりにして、私たちもできるかぎりのサポートをしていきたいと強く思いました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
スズキタカノリ

写真撮影

島崎信一(STUDIO S+PLUS)

写真提供

ゲッティ イメージズ
藤原道山

イラストレーション

こばやしみさこ

表紙デザイン・本文組版

STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-15
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
<https://www.kyogei.co.jp/>

©2020 by KYOGEI Music Publishers. ©-20

本書を無断で複製・複製することは著作権法で禁じられております。



LOVE THE ORIGINAL

楽譜のコピーはやめましょう

*ヴァン="vent"はフランス語で「風」。新しい音楽教育の地平を切り開いていく願いを込めています。

Recommend

オリジナル合唱ピース

○クラス合唱や全校集会、コンクール自由曲向けの新曲。

※発売日が延期となりました。

最新情報は教育芸術社ホームページでご案内いたします。

【同声編107】 すてきな友よ (アベタカヒロ 作曲)

【同声編108】 いる (大熊崇子 作曲)

【女声編 60】 夕暮 一女声合唱とピアノのための一 (土田豊貴 作曲)

【女声編 61】 ふゆはたまもの (横山潤子 作曲)

【混声編108】 ひとめぐり 混声合唱とピアノのための一 (三宅悠太 作曲)

【混声編109】 冬と銀河ステーション 混声合唱とピアノのための (木下牧子 作曲)

●各定価(本体600円+消費税)/B5判

クラッピング・ファンタジー集

○長谷部匡俊作曲。手拍子のパートに、ソプラノリコーダー、鍵盤ハーモニカ、ピアノなどの楽器を加えて編成された合奏曲。

※リコーダーや鍵盤ハーモニカのパートは、キーボードなどの息を使わない楽器に替えて演奏することもできます。

○楽譜集後半には、切り取って使用できるパート譜を掲載。小・中学校の授業や演奏会などに最適。

○収録曲：クラッピング・ファンタジー 第1番/第2番/第3番

●定価(本体800円+消費税)/A4判/48ページ

●ISBN978-4-87788-571-7



Music Edutainment Application

楽譜が読めるようになる！

Vol.1～リズムトレーニング～

○手拍子や打楽器を用いたリズム打ちの常時活動で活用できる、読譜力を身に付けるためのデジタル教材。

○先生がモニターなどに大きく映して授業で毎回10分間活用することにより、楽しみながら楽譜(リズム譜)の内容を理解することができるようになる。



「ビートトレーニング」
曲に合わせて一定の拍でリズムを打つ



「リズムリーディング」
楽譜を読むことに慣れる

○「リズムリーディング」では、選んだレベルに合わせて譜例がランダムに表示。

○「リズムアンサンブル」の練習ができるモードも搭載。

●価格：シングルライセンス(本体18,000円+消費税)

◇1台のパソコンにインストールして使用することができます。

※学校内の全ての児童・生徒のPC(タブレット含む)にインストールされる場合の価格については、弊社販売代理店にご相談ください。

●内容：DVD-ROM 1枚、解説書付き

●動作環境：Windows8.1、Windows10

下記ウェブサイトにて、動画サンプルと体験版を公開しています。

https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/gakufu_vol1/